# 日本人は中国で何をしたのか

文学部学友会は、先月27日、「今教科書を問いなおす」と題して、公開学習討論会を行った。暴動として教科書に記述された三・一運動が、むしろ明確な方向性と組織性をそなえた独立運動であったこと、しかもそれが、今なお祖国を分断されたままの韓国人、朝鮮人にとって、祖国統一のシンボルとして計り知れない意味をもっていることを学び、教科書検定の過程や検定官の人選について知ることによって、具体的に「教科書改正」がいかに真実をゆがめ、かつまた、支配者によって作り変えられているかを明らかにした。最後に映画「侵略」を上映し、南京虐殺や、三光政策の実態に触れることができた。

**侵略パネル展**

我々は、このような協働作業を通じて、過去の戦争が、戦争一般に解消されるものではなく、まぎれもなく侵略戦争であったのだということを確認していったのだが、一歩進んで我々が言いたいのは、政府＝文部省が必死で隠蔽しようとした侵略が、過去のものではなく、今なお厳存する事実だということだ。安価な労働力と市場を求めて、韓国へ、東南アジアへと進出していった日本企業は、形を変えた侵略に他ならない。日本で悪名をはせた公害企業が、東南アジアでは、公然と生産を行い、低賃金、長時間労働、労働組合もない、といった劣悪な状況下で多くの人々が働かされている。又一方、毎年恒例の如く行われているチームスピリットは、朝鮮半島での核使用を想定した軍事演習であり、自衛隊は、今明確に海外派兵を志向している。またぞろアジアの民衆を殺しに行こうというわけだ。

**侵略パネ**

日常的な経済侵略を我々の目から隠し新たな軍事侵略に対し、我々になんの痛痒も感じさせないためには、教科書が歪曲されねばならず、過去は忘れ去られ、美化されねばならない。逆に言えばこうだ。現在の欺瞞と恥辱にまみれた支配者とそれに屈服する我々の過去を、隈なく照し出すのが、過去の日本の皇軍のやったことだ、妊婦の腹を裂いて胎児をひきづり出したり、生き埋めにしたり、抗日分子になるからといって、幼児をみな殺しにしたり、生体解剖に使ったり、コレラ菌を注射したりといった行為を実際に日本人が自らの手で行ったということを、ほじくり返して来ては、繰り返し繰り返し白日の下に曝し出すことは、我々が現実を見据え変革してゆくために是非とも必要なことではないだろうか。

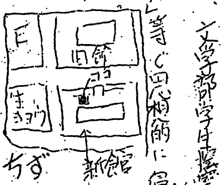
**侵略パネル展**

文学部学友会では、10月12・14日の間、学生控室において、『侵略パネル展』を行う予定だ。中国人虐殺の生々しい場面に我々は出会うことになる。約60枚の無言の証言は、我々に第三者であることを禁じる。一枚一枚の写真が、我々の今日的な責任を問う。学問の自由の名の下、あたかも第三者的立場が存在するかのような幻想をふりまくイデオロギー装置として機能している大学に籍を置く我々は、当事者としての、もっとはっきりと言えば、殺す側の当事者としての自分を見出さざるをえないだろう。そして大学そのものの在り方までも問い直さざるを得ないだろう。第二次世界大戦の時、戦争讃美の立役者として活躍した、当時の文学部教官西谷啓治の流れを汲む辻村が、これまた京大きっての反動イデオローグ今道を呼ぼうとしている。『侵略パネル展』の写真の一枚一枚が、その犯罪性をくっきり浮び上らせてくれるだろう。是非、一人でも多くの学友が、文学部学生控室へ足を踏み入れられるよう訴える!!

なお西谷啓治は、戦中は「近代の超克」等で思想的に侵略戦争を支え、戦後も一貫して右翼イデオローグとしての役割を果してきた

場所　学生控室

10/12・13・14日　よ



**学友会**

((じょう))